

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 http://www.higurashi.net/ 第0064号
護國青年會議機関紙 http://www.gokoku.net/ 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成21年10月25日

国士・中川昭一元財務相逝く



中川一郎元農水相

父と子の遺り残したもの
逝ること36年前の1973年、田中角栄首相による日中国交正常化に伴う中華民国（現・台湾）との断交に絶対反対の姿勢を貫いた憂国の志士たちは、政策集団「青嵐会」を結成した。
混沌停滞した政界に爽やかな風を送ろうと立ち上がったのは、元副総理・故渡辺美智雄、現東京都知事の石原慎太郎、ハマコーこと浜田幸一、



追悼・中川昭一氏どうなる日本再建
日本晴れの日曜日、早朝から聞こえる花火を打ち上げる音、時まさにスポーツの秋、各地で小学校や地域の運動会が盛んに行われていた穏やかな休日、テレビから「中川昭一元財務相が東京世田谷区の自宅で死亡」との速報が流れた。このニュースは瞬く間に日本中を駆け巡り、休日気分浸っていた日本国民に大きな衝撃を与えた。真正保守を結集し、日本再興の最重要政治家の一人であった中川氏の逝去は、国家にとって大きな損失であり、哀痛の極みである。此処に半旗を掲げて、謹んで哀悼の意を表します。合掌（スタッフ一同）

そして、昭一氏の実父で北海のヒグマの異名をとった故中川一郎元農水相ら総勢31名であった。この時、昭一氏は弱冠二十歳の若者で十年後に父の非業の死を受けて政界入りすると知る由もなかった。青嵐会の代表世話人となった一郎氏は6年後、中川派を結成し、鈴木善幸首相の後継を争う自民党総裁選に出馬したが、青嵐会時代からの同志で中川派の幹事長であった元外相の故三塚博の裏切りにより最下位に敗れた。金は受け取るが票は安倍へ、三塚の狡猾さに関して浜田幸一は「金ですべてを動かし、中川さんが苦しんでいるさまを横目に自身の出世に明け暮れた三塚君の人間性を許すわけにはいかない」と断じている。

総裁選に敗れて憔悴しきつた一郎氏は、1983年1月9日、宿泊先の札幌パークホテルの浴室で遺体となって発見された。当初死因は急性心筋梗塞と発表されたが2日後に死因は首つり自殺であると訂正された。前述の三塚博や公設第一秘書の鈴木宗男との確執、CIAやKGBとの関係から他殺説も囁かれたが真相は未だに明らかになっていない。日本民族の真の自由、安全、繁栄、独立を目指した一郎氏は志半ばで黄泉へと旅立った。享年57歳という若さであった。

父の遺志を継いで昭一氏が政界入りを果たしたのは、その年の暮のことだった。初当選から5年後には農水相として初入閣を果たし、以後経産相、財務相などを歴任し、将来の総裁候補としての地位を揺るぎのないものとした。昭一氏の政治姿勢を語る上で欠かせないのが特定アジアに対する極めて真つ当な主張である。特に支那に対しては辛辣で一言一句が走馬燈のように蘇ってくる。すでにご承知のこととは思いますが改めて、その発言を列記してみた。小泉内閣が打ち上げた東アジア経済連携協定（EPA）について：

「この構想は中国の参加を想定している。中国の参加は容認できない。昨年春に中国で起きた反日デモで、一般人や民間企業が襲われたことへの謝罪もない」

2006年6月、日本政府が凍結していた支那向けの円借款の再開を決めたことについて：

「なぜ中国に対し、また援助するのか、正直言って分らないし、無駄なことだ」

支那によるガス田盗掘に対して：（経産相時代）

「国民の財布が盗まれるのを黙って見ている訳にはいかない」と強硬姿勢を崩さず、帝国土油に試掘権を与えて採掘を開始しようとしたが、後任の二階俊博によって元の木阿弥となってしまう。

支那の軍拡路線に対して：



中川昭一元財務相

「中国は北京オリンピックを契機に経済的、軍事的台頭を終える準備を進めているのではない。日本はあと20年もすれば中国の省のひとつになつていくかもしれない。この国は私達でなければ守れない」と発言し、近年の支那における軍拡路線を批判し、支那脅威論を展開した。

2007年4月、温家宝の来日に対して：

「日本のナンバーワンが行つたのに、中国のナンバースリーが来るとはどういうことか、外交儀礼からいつて無礼なことだ」と、支那の外交姿勢を非常識だと断じた。

昭一氏は支那だけでなく米国やロシアに対しても毅然とした態度をとり続けた。また日本の政治家が長い間タブー視してきた「自前の核」についても踏み込んだ発言をして

いる

北方領土問題について：「ロシアが不法占拠していることは、声を大にして言い続けなければいけない。四島一括返還は北海道の政治家として絶対に譲れない一線だ。領土というのは二島と言つた瞬間に、二島以上のものは返つてこない」

原爆投下について：

「米国は戦争を早く終わらせためだと言っているがそんなことはない。原爆投下は米

国が世界ナンバーワンの軍事力を持つことと、それを誇示するための実験だった。日本人は実験台にされたのだ。米国内に抗議し、場合によっては国会で非難決議を行うべきだ」

は、最後となった9月14日付のブログの中で次のように思いの丈を述べている。中川氏が帰らぬ人となった今、この主張を中川昭一元財務相の遺言としてご紹介したい。

「非核三原則は国民との約束だ。しかし、最近の北朝鮮の核実験の動向や中国の軍事力の脅威を受けて、この約束を見直すべきか議論を尽くすべきだ。それなのに日本は今、三原則どころか『言わせず』を加えた四原則に『考えさせず』を含めた五原則となつて

あれから2週間が経過し、十勝は収穫の真つ盛り、コスモスが咲き乱れている。政治の世界は予想通り『危ない政権の危ない日本作り』が着々と進んでいる。『中略』

このように中川元財務相の国思ふ発言は枚挙にいとまがない。日本が日本でなくなりそうになつていいる今、中川氏の死去は日本国の損失であり、返す返すも残念なことだ。

私を含め多くの保守議員が議席を失つたが、まだ残つている。如何にして保守の旗印を立て直し、日本を守り、国民を守るのか真摯に議論して欲しい。心ある国民は是非共

26年前にこの世を去つた中川一郎氏が遺り残した『日本の真の独立』を成就させようと、心血を注いできた中川元財務相の心中深く、ある思いが滾つていた。その思いとは保守勢力の結集であり、中川氏が結成した『真・保守政策研究会』という名の『青嵐会』復興であった。

我々は中川氏の主張を遺言と受け止め、各方面に発信しなければならぬ。なぜならば『日本が危ない』からだ。願わくば、お父上とともに八百万の神々と一献傾けたあ

中川氏が主張する真・保守とは、守るべきものは守り、保守するためには改革が必要だということである。今夏の衆院選で一敗地に塗れた同氏

先した貴方の毅然とした態度には侍の威風さえ感じました。平成の国土のご逝去を悼み、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。 編集人・戸出蒼流

民主党の政権公約と夏休みの計画

小学生の頃、夏休みの過ごし方を計画表にして提出させられた記憶がある。計画表には起床時間や就寝時間のほかに、家の手伝いや勉強、遊びの時間などを記入しなければならぬ。できあがった計画表は粉飾、粉飾、また粉飾で粉飾の大作進、計画通り実行したら40日後には押しも押されぬ等生がでかあがり、親は喜び、教師からは褒められ、学校中の模範児童となる筈だった。しかし、そう上手くいかないのが世の常だ。元々できもしない計画など絵に描いた餅で無用の長物、夏炉冬扇の類である。だが悲しいかな知らぬが仏、それに気がつかないのは本人だけ、計画を立てたくらいで天下をとつた気分になり、夏休みが終わつてみれば元の劣等生のままだったという苦しい思い出が蘇る。

つらつら惟みると今、政治の世界でも同じようなことが行われている。民主党の政権公約がそれだ。今夏の総選挙で夜も明けぬうちから馬鹿の一つ覚えのように「マニフェスト、マニフェスト」と、できもしない公約を黄門様の印籠のように振り翳し、メディアと結託し、「盆の上の豆」である選挙民（小紙0063号参照）を愚弄して政権の座についた途端に、国民との約束を反故にするかのような発言が相次いでいる。「子供手当も、高速道路無料化も、農家の戸別所得補償も必ずやる。財源は無駄を省けば生まれる。これ以上国債を増やすような愚かなことはしない」と断言しておきながら、いざ蓋を開けたらどうなつたか、すでに承知の通りである。

年収1千万以上の世帯や在日特ア人も配布対象となる子供手当の陰で、多くの世帯が増税に泣かされるという現実を忘れてはならない。夫の年収が300万円、子供はいないが妻は親の介護で働くことができない家庭は、扶養控除廃止に伴い増税となる。爪に火をともしような暮らしをしている家庭が、年収が何千万円もあり、子供を有名私立小学校に通わせている家庭や、反日を生き甲斐とする在日南北朝鮮人及び支那人の家庭を援助しなければならぬ。何とも理不尽なことであり、格差は正どころか、ますます拡大することとなる。これが「国民の生活が第一」と標榜する政党のやることか、これを愚策と云わずして何と云うのだからか。誰にも迷惑が掛からない分だけ筆者の夏休みの計画の方が遙かにマシである。 編集人